



今年の暑さも、厳しいものでした。「異常気象」だと言われれば確かにそうかもしれませんが、それはあくまでも人間の立場で考え、思うことなのです。地球の立場からすれば、そうあらねば自分の体(地球)の安定が保てなくなってきたのだと、言われればなりません。

つまり、地球破壊がもたらす当然の結果としての事実を、私たちは眼前に見ているだけだということであって、やりたい放題に生きる奇怪な生物人間の後始末を、ただただ無言で引き受けて生きるしかない地球の、至極当然な姿を、今、見ているだけだ、ということになるのです。

となれば、人間の都合ばかりを優先させ、それが必ず未来を明るくするものと、**大いなる錯覚をして生きている人間の姿の方が、むしろ異常に思われてくるのです。**

山をくり貫くりニアモーターカーも、一時間 50 ミリの集中豪雨に対応できる都会の地下道も、みな地球を痛めつけてできていくのです。そして現在ではすでに、人間の便利さ都合で作られてきたものに逆に苦しめられる時代になってきています。そんな中には人間の薄っぺらな知恵でも、解決できることもあるのかもしれませんが、できないこともある事実を、私たち人間が、自然のあるがままの姿から敏感に感じ取り、自然との調和を考えていかなければ、ともに壊滅的危機への一途をたどることになるのではと、思われてくるのです。

「幸せ、平和、正義」のためにと殺し合わなければならなくなる人間の極限の愚かさや、哀れさとどこか似ているような、そんな人間と自然との関わりのような気がしてならないのです。

……親鸞聖人は2回結婚された……

玉日姫と恵信尼 その玉日姫の婚儀

M・M



玉日姫木像

貴族の名門である九条兼実 かねざねは、政治的失脚を機に法然上人への帰依を深めます。あるとき上人にたずねます 戒律を守る上人の念仏と、われらがごとき女性を囲い酒を飲む、俗人の称える念仏とは、その功德に大きな違いがありませんかと問うのに対し上人は「いずれも如来より賜りたる念仏、身分貧富による差別はありません」と答えますが、納得のいかない兼実は次のような提案をします 念仏の功德を世に示証するため、一生不犯を誓った聖僧を名指しください、わが娘、玉日姫と娶せていただきたいと言うものでした、上人はこの申し出を請け、善信を名指しします。善信は泣いて反抗しますが、法然上人は不動の信念をもって申し渡します。そなたは救世観音の夢告を受け、仏教改革の法頭 旗がしらにたつ志を固めたものと見受けられる、さればいまこそ奮起のときではないかと申します。核心をつかれた善信も、ひるの思いをいま正に行動に移すとき、と思ひ直し、果敢に申し出を受け入れることになりました。

玉日との結婚生活は、西の洞院の九条家別邸で営まれました、その後、男の子、範意(はんい)をさすかります。

しかし念仏の排斥の動きはきびしさを増しており、弾圧のときがせまっております。承元元年(1207年)越後遠流の刑をうけます。玉日姫は、あわただしさのうちに京都伏見の西岸寺で一行を見送ります、そしてこれが今生の別離となりました。このとき流罪の一行の中に、見習い奉公に来ていた恵信尼が、帰郷のため一行に付き従っていました。玉日姫は承元3年、若くして生涯を終えます。

1211年流罪が赦免になったあと、親鸞聖人は一度京にもどり、滅刑に奔走した中納言範光(のりみつ)へのお礼言上、法然の墓参、そして吾が子 範意と共に、玉日姫の廟所に詣りました。

越後では竹の前(たけのまえ)はな草庵で、恵信尼との結婚生活がはじまります。そして恵信尼は生涯の伴侶となり、常陸での布教のため苦勞をともにしました。こうして長く守られてきた「邪淫戒」を否定し、大きな改革の足跡を残すことになりました。



玉日姫 廟所(西岸寺)

秋季永代経 九月二十三日水

お斎あります

法話 午前 S・J 師 三重県 G 寺住職

午後 若院

若坊守による真宗宗歌 恩徳讃



お盆を過ぎると、どんなに暑い日が続いたとしても、自然は秋が間近にあることを知らせてくれます。

また秋彼岸には、忘我の日常から、ふっと我を取り戻すことができる不思議に穏やかな時の流れを感じる頃でもあります。

「先祖を身近に感じながら、私の生き方を、今一度確かめてみる機会にしていけたらと思います。」。参詣をお待ちいたしております。



九月の学習会

九月十二日(土)七時～

八時半

「お文」学ぶ」

若院法話

感想 意見交換 お茶の時間

「お文」に学ぶ

感想 意見交換

「こ」報告

八月十五日 九時より

墨俣町戦没者追悼会を

お勤めさせていただきました。

戦後七十年。「遺族」縁ある方々が少なくなる中、およそ五十名の方々に参加いただきました。

三十分ほどの法話もさせていただきました。



「浄土真宗を学びたい」が、未知への歩みの、一歩となった。

—— 日常で確かめる「生きた仏教」の大切さ ——

S・M

「縁あってお寺に嫁ぎ、はや七年目になります。せつかくお寺に嫁いだのだから、これを機会にぜひ浄土真宗を学びたい」という思いになりました。子供も少し大きくなり、周りの皆様の後押しもあって、四月から同朋大学別科に通学しています。

大学では声明作法をはじめとして、仏教史や親鸞聖人の生涯、著書などを通してとても多くの事を学んでいます。

聖人の著書である『教行信証』の行巻に正信偈が収められています。その中に釈迦如来興出世 唯説弥陀本願海」とあります。これは釈迦如来がこの世に興出されたのは、ただ弥陀の本願を私に説かんがためである」と学びました。それは、ただひとえにこの私を救わんがためである」と受け止めていただきました。

今まで本堂で拝する阿弥陀様はキラキラと輝いているからエライ人なんだ、という程度に考えていた私は、実は私を救うために、そこに居たんだのか」と思うと、阿弥陀様をとても身近にも感じることができ、思わず手を合わせ「南無阿弥陀仏」と唱えてしまうのです。

「この先、子供たちが大きくなって、何か迷ったり、ぶじかたりしたときも、阿弥陀様がいつもあなたを救おうと見ていてくださるから心配ないよ」と声をかけることができそうです。

毎日の生活の中で、生きた仏教を学び、実践して「へい」というのが大切なんだと、今感じています。

私の実家はお寺でもなく、仏壇もなかったのですが、お寺さんにお参りに来ていただくとか、手を合わせる習慣もなかった私でしたが、八月には若院の主人と共に常飯に参らせていただきました。習っていたの声明で申し訳なかつたのですが、皆さんとても温かく迎えてくださったので、あつがたくく思っています。

八月二十日から本山で、前半の修練が一週間始まります。とても不安ですが、学び多きものとなるように、気を引き締めて臨みたいと思っております。また、機会があれば皆様に修練の「こ」報告ができれば幸いです。

住職より

由ひの発心により、一人の念仏者が誕生した。この上なき喜びを感じています。御同朋の心を導くことに、共に教えを聞き続けたいと、身となすことを願っています。門徒の皆様、お祈りを申しあげます。

寺